

「図画工作」授業の構築に向けて

—香川大学教育学部での実践事例—

古草 敦史

(人間環境教育講座・美術教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Toward Improving the Teaching Method in Arts and Crafts: Case Study in the Faculty of Education at Kagawa University

Atsushi Furukusa

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 小学校および幼稚園教員、保育士を目指す学生は、近い将来、子どもの造形表現活動を支援するために、もっとも必要な基本的能力である造形表現の楽しさや喜びを、自ら知ることが大事である。そこで、本研究では、「図画工作」授業において、学生が備えるべきこの基本的能力を十分に獲得できるようにするために、これまでの実践を振り返り、目標設定と計画、内容についての検討を行った。

キーワード 描く 楽しさ 親しみ 絵画表現の基本

1. はじめに

造形表現活動は、人間にとって本能的で根幹になる大切さをもった行為であるとされる。実際に、幼児は描画材料がなくても結露した窓ガラスに指で絵を描き、どろんこ遊びで団子を作る。また、遊びを中心にした生活のなかで、始めは与えられたものであっても、すぐさま自発的に何の制限も感じない様子で、クレヨンなどの描画材料を用いて絵を描いたり、粘土、色紙、さまざまな身近な材料を使って立体的なものを作ったりすることに没頭する。これらを観察すれば、造形表現が人間の根源的欲求であることは容易に確認できる。

しかし、そのような人間の根源的欲求である

にもかかわらず、私たちはときを経るにしたがい、絵を描くことやものを作ることから遠ざかってしまう。青年期に入るところから、それまで好きでよく行っていた造形活動は、自発的にされなくなる場合がほとんどである。造形意識は、私たちの心の奥底に閉じ込められ眠ってしまうかのようなのである。

つくるという造形表現活動への関わりが希薄になってしまう要因には、一人ひとりの持ち味によって、制作の過程において自らの真実ともいべき作品を導き出せばよいはずのところを、ある一つの真実に到達できなければならないという誤解がある。また、造形表現特有の制作されたものの評価の不確かさから、充足感が得られにくいこともある。ここには、外か

らと自身との双方の評価があるが、とりわけ自身による評価では、自らの感性への疑いが生まれてしまうことが多い。さらに、実際の制作では、自然などを模倣しようとするときに困難さを覚えることもあると思われる。何かしらの技術の習得が必要になると感じてしまう。そこにはしっかりと模倣できないとならないという意識も生まれているのであろう。その意識によって模倣、つまりは写實的に描けるようになると、その制作姿勢を持続できる場合はそれでよいが、しっかりと模倣することばかりが造形表現活動ではないことの理解が欠落してしまう。そして、美術は難しい、ときにはあまり楽しくないと思うようになってしまい、つくるという意欲は私たちから遠のいてしまう。

2. 授業展開への指針

筆者は、香川大学教育学部に赴任した平成21年度に担当することになった科目のうち「図画工作」(授業科目名:図画工作Ⅱ(ハ)・後期開講)をまず、どのような考えをもとに行うべきかを検討するとき、初めての経験であるので、前期早々に同僚の美術教育講座教員の方々に相談をもちかけた。履修内規はもとより、当然ながら受講予定者はさまざまなコース、領域の学生であること、さらに、この授業の目的、達成目標の指針などについての明確な助言を受けることができた。

この図画工作は3つにクラス分けされているが、教員の専門分野によって、立体領域、デザイン・工芸領域があり、そして、筆者が担当する絵画による平面領域がある。従来から行われているいずれの授業とも、目的、達成目標は、「小学校における図画工作の担当者として、もっとも必要な基本的能力である、美術、造形の楽しさを知ることを目標にし、それを実際に体験する。同時に、美術各分野の実技の基礎、基本を身につけ、また、鑑賞を通じて美術に興味関心を高める」(保育士養成科目としても行われている)としている。

この従来から掲げられている目的および達成

目標は、筆者が常々感じている懸念に合致した問題への喚起を含んでいた。とりわけ「楽しさを知る」は、美術の実践に対してこれまで蓄積された誤った理解や、ある時期から自発的にされなくなったことにくわえて、家庭や学校教育の場でも実際の制作環境が保障されにくい状況から生じる、苦手意識と難しいものと感じる学生の意識への素朴で純粋な呼びかけである。「楽しさを知る」は、図画工作の担当者として基本的能力のもっとも大事な要件である。

そこで筆者は、小学校および幼稚園教員、保育士を目指す学生が、近い将来、子どもの造形表現活動を支援するために、この「図画工作」の授業を通して、造形活動に対する苦手意識を拭い取って、自らが楽しみ、喜びを味わう心情を回復し、さらに継続していくきっかけになることを、この授業の大事なねらいとした。

本科目は、平成21年度後期を経て、平成22年度の前期分(授業科目名:図画工作Ⅰ(ハ))を終え、現在、後期授業に入ろうとしている。この間、学生の取り組みや目標達成の程度を考慮し、授業内容の改良を行ってきたが、さらに本稿での検討を通して、今後の授業運営に役立たいと考えている。

3. 平成21年度・後期授業について

3.1 概要

本授業では、平面領域における絵画の制作を行う。どのような制作内容にすべきかを考えるとき、何よりも取り組みやすさを考えなければならぬ。そのなかで、描くモチーフに感情移入のしやすさとそこに描く意味をもてるかが大事である。また、課題の順序も取り組みの連続性の観点から重要である。そこで、初年度では、以下の課題を与えた。

- ① 写真の人物を描く(シャープペン/画用紙)
- ② 風景を描く(シャープペン/画用紙)
- ③ 風景を描く(コラージュ/画用紙)
- ④ 小さな絵とそれを収める函作り
(シャープペン・アクリル絵具・ボール

ペン等の任意の描画材料・色紙/ラベル・画用紙・ケント紙・フィルムパック・ダンボールケント紙)

(1) 使用する材料等

絵の制作には、描く画面の大きさも大事であり、学生が無理なく取り組めるサイズを考慮することが必要である。①の課題では、最初の1作目であること、写真(雑誌等から)の大きさから推察して、八つ切を半切した小さめのサイズが適当と考えた。②では、せっかくの屋外(幸町北キャンパス内)での制作であり、おおらかに描いてほしいことから少し大きい八つ切とした。③でも、②での制作をもとにすることから、八つ切サイズとした。④では、手のうちに納まるような感覚で制作できるように、13×17.5cmのかなり小さなサイズにし、また、それを収める函は、作品のサイズから17.1×24.5×2.8cmとした。

描画等の材料は、①、②ともシャープペンとし、③では、色彩を用いることにしたが、色彩の見極めが簡略にできるように色紙によるコラージュとした。色紙は20色ほどを豊富に用意した。④の小さな作品でも色彩を用いるが、ここからは描くことを行う。いろいろな塗り方のできるアクリル絵具を筆者が用意して使うほか、シャープペンやボールペン、マーカー等、学生が普段から筆記で使っているものもよいとした。筆は、三種類のポスター筆(面相筆、6号程度の丸筆と平筆)を筆者が用意した。いずれも、やはり学生が無理なく取り組めることを念頭に置いた。

また、④は、いくつかの作品を描くとともに、それらを長く保存できるようにするために、収める函も作ることにした。この函の材質と形は、筆者が所蔵している美術家、大竹伸朗の作品集(1986.「《倫敦/香港》1980」,用美社)を参考にした。

(2) 制作内容

①「写真の人物を描く」について

ファッション雑誌等から人物の写っているページを持参してもらい、それを見ながら画用

紙に写し取る課題である。写真という平面のものから描くことは、現実の空間にある立体的なものを描くよりも容易であるが、そっくりに描けたときの充実感はある。これは模写に似ているが目的は異なる。あくまでもそっくりに描こうとすることで、非常に限定的であっても学生を写実絵画の世界に近づけることをねらいとした。この行為による充実感、筆者自身が高校生のころに得た率直な実感である。写真の人物をそのままそっくりに描こうとすることは、本来の意味でのものの存在感を表すこととは違い、明暗として見える現象のみを捉えることになる。しかし、描かれた作品がたとえ現象的であっても、ここで人物らしさを描いた経験は、本来の意味での人物を描くきっかけになってくれるものと考えた。授業回数は2回とした。

②「風景を描く」について

学生にとって多分に久しい経験であろう。外の空気に触れながら景色をながめ、ゆったりと描く体験をしてほしい。また、自分の身を置くキャンパスを改めて見つめ、その視覚的なおもしろさを再発見したり身近に感じたりしてほしいと考えた。

キャンパスは木々が多く、それらの自然物と建物を必ず描き入れるようにし、特に建物の描写によって、パースペクティブ(透視画法・遠近法)のあり方を少しでも理解できるように願った。授業回数は2回とした。

③「風景を描く(コラージュ)」について

②の作品から新しい画用紙におおまかな形を写し取ったあと色紙によってコラージュをして、ちぎり絵のような作品を制作した。この課題も2回の授業とした。

②の制作時に各学生の描いている風景を写真に撮っておき、実際の色彩を参考にさせたが、ここでは、そこから各自の感性を働かせて自由に色彩をくわえていくようにした。例えば、木々の葉では、一様に見える緑であっても、そこに意識して豊かな色彩を与えることによって、空間の広がりや表せることができることを実感してほしいと考えた。

④「小さな絵とそれを収める函作り」について

ここでの制作は、学生にとって、すぐそこにあるものや個人的な心情を絵に表すことをねらいとした。複数の課題を用意し、それらに臨む姿勢は、そのときに浮かんだアイデアや気持ち(描き方を含めて)を、失敗を恐れずに即描くこととした。また、原則として1回の授業で2作品を完成することとした。課題は、次に挙げる8つである。

1)「マイシールを作る」

市販の小さなラベルシールに好きな絵を描く課題である。最低6枚は描き、それを台紙に貼り、さらに透明フィルムパックに入れ、完成とする。描く絵は何かのキャラクターでもよいし、模様や文字でもよく、1枚にかかる時間は非常に短くてもよい。学生は、もっている引出しから次々にアイデアを出していく。完成作は素朴で小さな作品集になる。

2)「指紋から描く」

自分の指紋を描くのであるが、具体的な形から、イメージを膨らませていく楽しさを味わってほしいと考えた。指紋の形はきっかけであり、曲線を自由に描いていくこと、また、色彩も自由に使ってよい。

3)「好きな言葉を描く」

どんな言葉であってもよいとし、学生は、自分にいい聞かせてみたい言葉や何かしら思い入れのある文を描くことだろう。ここでは、絵にするために、書くではなく、色を使って描く。絵らしい絵ではなくても、文字によっても絵らしい作品ができる楽しみを知ってほしいと考えた。

4)「好きな曲の歌詞、楽譜を描く」

この課題も通常考えられる絵にするモチーフではなく、文字や記号を描くこととした。特にポップスなどであれば、3)よりもより身近に感じられるモチーフとなり、親しみをもって制作されるであろうと考えた。

5)「今ほしいものを描く」

ほしいものという、思い浮かべるだけで気持ちがわくわくするものを描く。その気持ちは、思い入れをもって描く行為に反映されると考えた。描く際にはそのものの画像を用意し、それ

を見て制作する。

6)「見つけた植物を描く」

植物は、キャンパス内等で通りすぎりにあるものを見つけて持参してもらうことにした。日常の空間に何気なくあるものに眼差しを向ける貴重さと、このような些細なものでも絵になることを感じてほしいと考えた。植物はあらかじめ押し花にしておき、平面的になった状態を描く。また、バランスを見ながら画面の半分的位置に描き、残りのスペースに実物の葉を貼り付ける。

7)「今の気分を描く」

5)、6)と続けて具体的なものを描いたので、具象性を求めない課題とした。気持ちを色彩で表し、そこに形を描くことに縛られない表現を体験してほしいと考えた。

8)「大切にしているものを描く」

再び具体的なものを描くこととした。モチーフは持参してもらう。それは、長い間大切にしているものや特別に大切にしているものとした。ここにおいても親密感のあるものを描くことで、強い制作意欲を發揮しながら楽しめることを期待した。なお、持参してもらったものを大事そうに手にもった状態で写真に撮り、収める函の裏蓋にその写真を取り付けることにした。

最後に上記の作品群を収める函を作る。まず、筆者が用意した図面にしたがって函の土台を作り、そこに描いたりコラージュをしたりして飾り立てをする。全体に装飾を施して、この函自体も作品として成り立たせるように考えた。

函は、装飾することによって充実した作品集になり、これを一層大事にしようという気持ちになってくれることを期待した。

3.2 授業を終えて

用いた画用紙サイズは、学生の取り組みを見た結果、全課題を通して概ね適当であったと思われた。しかし、使用した描画材料のうち、シャープペンについては問題があった。学生が普段、使っているものを用いることで、その日

常性から臆することなく制作が進んでいくであろうことを第一に考えたのであるが、①「写真の人物を描く」や②「風景を描く」では、特に不都合であることが観察された。それは、絵を描くとき通常用いるべき鉛筆によってできる筆圧の強弱や筆先を斜めに使うことで可能になる濃淡の表現が、シャープペンではしづらいことであった。そのような描画材料を工夫する楽し

みを与えられなかったことは、今後の課題とするべき点であった。

各課題の内容について振り返ると、①では、熱心に取り組む姿勢と、でき上がった作品を友人たちと批評し合う様子が見られ、学生は楽しんだということと、どれほどか似せられたという充実感を得ることができたと思われた。また、はっきりとした目標があり、取り組みやす



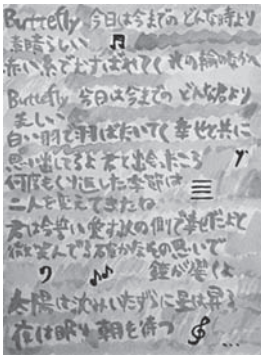
1) マイシールを作る



2) 指紋から描く



3) 好きな言葉を描く



4) 好きな曲の歌詞，楽譜を描く



5) 今ほしいものを描く



6) 見つけた植物を描く



7) 今の気分を描く



8) 大切にしているものを描く



作品集(函)

図1 ④「小さな絵とそれを収める函作り」の作例(平成21年度・後期授業)

いことは授業の導入に適しているであろうと感じた。しかし、問題点としては、すべてをフリーハンドで描くこととしたため、特に描き始めに若干の難しさをともなった制作になったことである。描く困難さを描く楽しみにつなげてほしいこともあるが、ここにおいては制作の方法として考慮が必要であると思われた。

②のスケッチでは、学生は木々などの自然物と人工物の建物を必ず描き入れることとしたなかで、思い思いの場所を探して描いた。自分が通う大学の一端を改めて見つめることは、新鮮に感じられたことであろう。それぞれの描く場所を探しにいく前には、パースペクティブについての知識をもってもらうために教室で講義を行ったが、学生はこれについてよく理解し描く姿勢をもっていた。しかし、限られた時間のなかで、木々の複雑なあり様や自転車、車などのキャンパス内の雑多にあるものを描くこと（あるいは省略して描くこと）は、多くの学生にとって非常に難しかった。その様子から、ここでの学生にとっての描く対象は、前提として、ある程度絵になる風景が必要であろうとも感じた。

②のコラージュでは、上述のように風景課題を課すこと自体に問題点があったが、現実にとらわれず自由に色彩を使うことに、学生の創作意欲を引き出す効果があったと思われた。さらに色紙による単純化した色彩は、近景、中景、遠景の作り方を理解することにも有効であった。

④は、8つの課題内容を最初に提示したが、学生は、強い興味、関心を示している様子であった。小さな画用紙であること、気持ちを楽にして描くという姿勢であること（明らかに失敗と感じた場合は破棄してよいとして、新しい画用紙に描くように指示した）、ごく個人的なテーマとして絵を描けることに取り組みやすさを予想したようであった。ここでの課題で観察された学生の様子は、①のとき以上に互いの作品を鑑賞し、批評し合っていたことである。

心のなかに浮かんだイメージや、必ずしも具体的な形を描かなくてもよい課題である1)、

2)、3)、4)、7)では、学生それぞれは個性的で豊かな表現を行うことができたと感じられた。具体的な形を描く課題の5)、6)、8)では、モチーフは学生にとって親密なものであることから、描く行為に切実さと意義をもって絵にすることができたのではないかと思われた。また、1)で特に見られたのであるが、作品を誰かに贈ることを想定してもよいので、そのような場合にも自分のために描くこととは違った感性と創作意欲を発揮して、筆はよく進んだ様子であった。さらに、5)では、ものではなく時間を題材にするという独自の視点による作品も見られた。このような筆者の想定を超えた作品内容は、ほかの課題でも多くの学生に見ることができた。

収める函作りでは、アクリル絵具や学生がもっている描画材料と風景制作時にも用いた色紙によるコラージュを駆使して制作を行った。学生は具体的なものを描いたり、装飾的な模様をコラージュしたりして、思い思いの飾り立てを施していた。この函の形態は、美術家、大竹の作品集を参考にしたが、学生の作り上げた函も、それに負けないものになったと感じた。

全体を通しての問題点は、課題数が多く、④の後半の制作が少し忙しくなったことである。対策として課題内容の整理を行い、もう少し余裕をもった時間配分が必要であると思われた。

この授業での制作は、総じて、学生はどれだけ存分に自由に手を動かすことができ、ときには親密な自分の世界に入り込んで描くような感覚をもって意欲的に取り組めるかが大事な要件であり、そのための授業内容であるべきことを再確認した。

4. 平成22年度・前期授業について

4.1 概要

平成21年度後期での学生の取り組みや制作した作品内容を考慮し、以下の課題とした。

① 写真の人物を描く

② 抽象的な絵を描く

(鉛筆・アクリル絵具/画用紙)

③ 小さな絵とそれを収める函作り

前年度からの変更点は「風景を描く」での2つの制作をやめ、新たに「抽象的な絵を描く」をくわえたことである。風景の課題内容の要素は、③の6)と函作りのなかに取り込むこととした。

変更を行ったことは、前年度において全体の課題数が多過ぎ、授業後半の制作があわただしく乱雑になったと感じたことから、全体の課題構成を見直したためである。

(1) 使用する材料等

描く画面のサイズは、①、③ともに前年度と同様とし、新たにくわえた②の課題は、八つ切とした。

描画材料については、①では鉛筆、②において鉛筆とアクリル絵具を用いた。なお、いずれの課題、場面でもシャープペンではなく鉛筆を使うこととした。これはシャープペンでは、表現の幅が広がっていかない前年度の学生の様子を見ての判断である。鉛筆は、3H～3Bを1本ずつ持参してもらう。この授業をきっかけに、本来、絵を描くために必要な種類の鉛筆をもつことは、学生にとって今後にとって有益であろうと考えた。

また、③において用いる材料等は前年度と同様とした。

(2) 制作内容

①「写真の人物を描く」のねらいと内容は、前年度と同様としたが、制作方法に若干の修正をくわえた。③でもほぼ前年度と同様のねらいと内容であるが、前年度に行った風景課題の要素をここに取り入れた。6)においては植物を見つけることをキャンパス内で行うように指示し、キャンパス内をある程度時間をかけて歩き、探すようにした。そして、描く際には植物とともに、見つけた場所にあるほかのものや色彩を画面に描き入れ、風景を静物的なささやかな小空間として捉え描くこととした。一方で、本来的な風景画制作で必要になる、パースペクティブなどの遠近法についての知識を習得する

ための講義も行った。なお、コラージュについては、コラージュそのものの楽しみを函の制作で積極的に行うようにした。なお、1回の授業で1作品を完成することとした。

新たにくわえた②「抽象的な絵を描く」は、画家、谷川晃一執筆の絵画制作実践書(2000、「谷川晃一の自由デッサン塾～楽しく描こう～」,日本放送出版協会)を参考にして、次の2課題を用意した。

1)「自由な軌跡を遊ぶ絵を描く」

2)「多様な線の織りなす抽象画を描く」

両課題とも、絵画の基本的要素は、点・線・面であることを知って、具体的なイメージにとらわれなくても絵は描けるという体験に適していると考えた。くわえて、③での取り組みの前提として、描くという行為のトレーニングになることを期待した。両課題ともそれぞれ1回の授業で行うことにした。

1)は、柔らかい3Bの鉛筆を使い、まず、斜めに用いてタッチを残しながら画面全体を塗りつぶす。次にプラスチック消しゴムをゆるやかに回転させながら白い線を描いていく。そして、その白い線の軌跡をたよりに今度は鉛筆を立てて使い、曲線による閉じた形をいくつか描く。最後にその形のなかに点や丸い形を描き入れる。ここでは、無作為に近い描写から生まれる有機的な形に、何かの生き物を見ることができると不思議さを体験してほしいと考えた。

2)では、任意の硬さの鉛筆を使い、まず、フリーハンドによって、2cmくらいの間隔で縦横に点線やジグザグな線などの多様な線を引く。次にその格子状の画面のなかに斜めの線を自由に描きくわえる。そして、次には様々に引かれた線をたよりに自由に彩色する。ここでは、純粋な抽象画制作の体験と、少ない要素のなかにも豊かな表現の可能性をあることを理解してほしいと期待した。

4.2 授業を終えて

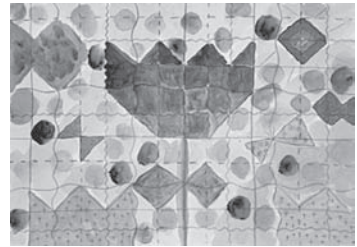
鉛筆を使ったことは、全課題を通して描画材料を工夫して用いるという楽しみを味わうこと



① 写真の人物を描く



② 1) 自由な軌跡を遊ぶ絵を描く



② 2) 多様な線の織りなす抽象画を描く

図2 作例（平成22年度・前期授業）

に有効であった。学生は、筆先を斜めに使うことのできる柔らかいタッチや筆圧を変えてできる線の太さの違い、筆先の丸みの違いによっても変化のある線が引けることに、その表現の幅の広さを感じたのではないかとされた。なお、鉛筆の購入に際しては、なるべく一般の文具店ではなく画材店できるように勧め、店内を回っていろいろな画材なども見てみるように助言したが、初めて画材店に行った学生も多く、画材の種類の高さに驚いたり、おもしろがったりしたようであった。これも造形活動への親しみをもつきっかけになることを期待した。

各課題の内容については、①では、前年度に見られた問題点を考慮し、描き始めの段階で人物のおおまか形（全体の輪郭や顔の各部分等）をトレスリングペーパーによって写し取ることにした。輪郭などをなぞることで取り組みの始めは容易になり、そっくりに描けたという結果を求めやすくなった。これは機械的な作業になるが、学生は、幼いころに行ったであろう塗り絵の感覚で描く楽しみを味わえたのではないかと感じた。

②では、学生は、両課題とも筆者の指示通りに筆を進め、子どものする落書きのような感覚で楽しんでいて、何ができるのであろうかと不思議に感じている様子であった。課題の意図は、あえて始めに説明せずに描かせた。制作後の説明によって、絵画の基本的な要素とその簡潔性を理解することに役立ったと思われる。

③は、授業全体の課題構成を見直したため、余裕をもった制作が可能になり、多少の個人差

はあるものの1回の授業で1作品の取り組みにすることができた。また、②の課題をトレーニングとしたことによって、抽象画の要素のある2)や7)において、課題の流れに沿った有効な制作になった。

前年と同様に、学生は互いに作品を鑑賞し合う姿がよく観察され、描くことやつくることの楽しみを実感しながら、改めて造形活動に親しみを覚えた様子であった。この課題は、授業回数も多くを使うことと最終的に作品集に作り上げることもあり、この授業の主要な作品としての制作になった。

5. 今後の課題

以上のように、前年度後期と今年度前期の授業内容について振り返ってきたが、ここで、本授業の大事な目標である「学生自らが描いたりつくったりすることを楽しむ心情を再び呼び覚ます」ということを、今後もよりよく達成していくために検討が必要である。そしてさらに、同時にもう一つの大事な目標として掲げている「実技の基礎、基本を身につけること、また、鑑賞を通じて美術に興味関心を高める」も疎かにせず、大事にしていかなければならない。

課題構成全体としては、制作に飽きないという観点から、さまざまな作品を次々に制作していくことは有効であると考えられ、今後もこれを続けることにする。ただし、1作品に多くの時間を掛けたい場合や進み具合に個人差があるので、無理に先に進めることは考慮が必要であ

ろう。

これからの後期においても今年度前期に行った3課題を同様に実施するが、方法等について改善すべき点が考えられる。①「写真の人物を描く」については、学生にとって写実的な描写の可能性を求める課題であるが、本来的な模写の大事さを考え、制作方法の改良が必要である。そのために、ルネッサンス期等のデッサン作品の画集を用意し、模写することを考えている。それによって、ものの形態感の捉え方がより理解しやすいと考えられる。なお、ここにおいて、風景画等の画集の鑑賞によって、ものの見え方と捉え方の大事な一つの方法として、遠近法や遠近感の表し方についても解説すべきであると考えている。

②「抽象画を描く」では、絵画の基本的な構成要素を知るために制作前後に、ここにおいても画集によって絵画を鑑賞し、絵画の構成要素についてや抽象的な作品制作のおもしろさを解説する機会を設け、課題の意図をわかりやすく具体的に示すようにしたい。それは、③の課題へのつながりもよくなると思われる。

③「小さな絵とそれを収める函作り」については、②の2)「多様な線の織りなす抽象画を描く」でも同様であるが、絵具と筆の扱いについて、水の含ませ具合や多様なタッチによる表現の違いを絵画表現の基本の一つとして意識的に行わせることも重要であろう。また、そのような技法についての助言や声掛けによって、描かれる作品に共感するとともに発展した表現が行われることを求めている。

また、①、②の作品も小さな絵のサイズに統一することを考えている。それによって、すべての作品が作品集に収められ保管が容易になり、学生は自らが描いた作品を長く大事にして、造形表現活動に親しみをもち続けることが期待できるであろう。

本授業の目的、目標を確実に達成していくために、今後も学生の取り組みを観察し、課題構成や方法等の改良とともに、学生が親密感と描く意味ももてる課題内容をさらに検討していくことが大事であると考えている。

参考文献

- 若元澄男（編集）（2004）「図画工作・美術科 重要用語300の基礎知識」 明治図書出版
- 谷川渥（監修）（2003）「絵画の教科書」 日本文教出版